

新たな一歩を子どもと共に

—— 出会うことのすばらしさを感じて ——

大 崎 亜 友 美*

A Next Step With Children

Ayumi OSAKI*

はじめに

社会問題として取り上げられるようになっていた児童虐待の真実を知ったのは、『ネグレクト 育児放棄』（杉山 春）『親子再生』（佐伯裕子）に出会った高校時代。それらの本は、事実を知らないことの怖さ、事実を知らないことから生まれる偏見に気づかせてくれた。これを機に、社会の出来事に関心をもつようになった。以降、中学校での職場体験がきっかけで保育士を志望した筆者は、子どもを取りまく社会に目を向け、子どもも保護者も共に笑顔で過ごせる関係をつくりたいという強い思いを抱いた。

大学時代、自主ゼミ「パパママ応援団 ぶんこ」でオープンスペースの企画・運営に携わり、子育て中の保護者、地域で子育て支援を行っている支援者と関わる機会をもち、現場の声を聞くよう努めてきた。支援者という立場とはいえ、子育て経験のない学生に何ができるのかという疑問をもちながら活動を続け、見つけた答えは、支援者は人を助けるばかりではないということだ。人との関わりは常に相互関係であり、互いに助け、助け合うものである。そして、その関係は自己を知るきっかけをもっている。

筆者は、オープンスペース参加者とのつながりに自己の存在意義を感じ充実感を得た。また、

運営に助言を下さっていた方の一言で「人を信頼しきれていない」自分に気づくことができた。人と関わることで、こんなにも自分自身が見えてくるのだと実感し、人との関わりを避けてきたことを意識した。その経験から、「出会い」は自分自身を成長させるものであると思えた。

大学卒業論文作成を通していろいろな本や人と出会い、自分を見つめ直すことで、子どもたちと共に歩いていく保育がしたいとの思いをもつことができた。また、保育実習で出会った子どもや保育士からは、子どもが育つ実際の環境と、その環境を創り保育を繰り広げている保育士を知ることができた。どんな時でも、出会いは、自分の中になかった新たなものとの遭遇であり、似通ったものでさえ自分を高めていけるチャンスをもっているものであった。

1. 「出会い」は学びの始まり

(1) 子どもたちへの願い

自ら変わり、大きくなろうとする子どもにとっても「出会い」は新たな世界を知ること、学びの始まりである。そして、その学びがあるからこそ人は変わろうとし、よりよい自分になれるよう変わっていく。普段の生活の中に、意味ある出会いをどれだけ用意でき、共に学び合っているかが保育士の力量であり、子どもに最善の利益を保障することの一つである。

* 広島市立保育園保育士（初等教育学科27期生）

「出会い」は必然的に自己を問う。自分の感情・身体に丁寧に向き合い、自分を知っていくことが「出会い」をより豊かなものにしていく。「出会い」を通して、人との結びつきのすばらしさを感じ、人を信頼して共に生きることができる子どもたちを育てていきたい。そして、自分の人生を自分自身で歩いていく充実感、自分に生かされ、自分を生きること、そして命を与えてもらったことへの責任を感じていける心を育み、よりよく、主体的に生きていこうとする大人になってほしいと思っている。

(2) 広島文教教育学会での「出会い」を機に

子どもたちへの願いや伝えたい思いはあっても、それを日々の保育実践のすべての根底において子どもと関わることができたと問われれば、頭を横に振らなければならない。

日々刻々と変わっていく保育場面への対応・子どもたちの姿に悩みながら保育を続けて3年目になった。経験を重ねるごとに、見えてくる課題が大きくなり悩みは増える一方である。日々の保育を創っていくことに精一杯で、記録を残し、振り返りをしていく余裕のない日が続いた保育士3年目の春。文教教育学会での実践研究発表依頼を受けた。これを機に、これまでの歩みを振り返り、実践を通して子どもたちに大切にしたいと思った経験、現場に出て感じたことを意識化し、次の実践につなげるとともに、また新たな「出会い」をしたいと思った。

2. 葛藤の日々から

(1) 保育園概要

1. 自然の少ない保育園 勤務先の保育園は、広島市内中心部に位置する。市内電車が目の前を走り、交通量の多い道路に囲まれるように園舎が建つ。塀や壁に囲まれた空間は筆者が育った自然豊かな広々とした生活環境とは程

遠いもの。筆者の理想とは異なり、園庭の真ん中に木が一本立っているだけの、緑のない園庭に息苦しさを感じた。勤務初日、この環境で保育をしていくことへの不安が込み上げてきた。

2. 環境は創るもの 保育士の思いで環境は変えられる。それを実感したのは、日々の忙しさを感じさせないくらい熱心に保育に向き合う園長の存在だった。筆者と同じ年に転勤してきた園長は、同じように園内の自然の少なさに違和感をもっていた。その感覚が園長自身を動かし、自然体験を通じて思いやる心や命、ものを大切にする豊かな感性を育む環境づくりを実践できる保育者を証明する資格である「子ども環境管理士1級」を取得するに至った。

園長は、園の一角に雑草畑をつくり、ねこじゃらしなどの雑草が育成する場所を作った。そして、自然とシヨウリョウバツタなどの虫が生息することができるようになった。また、園外散歩を積極的に薦めた。最善とはいええない現状を変えたいという強い思いと地域を利用して子どもたちの経験を豊かなものにしていきたいという、子どもに対する責任が伝わってきた。刻々と変化する社会状況をとらえ、津波発生を想定した避難訓練を実施するなど、保育所に求められることを敏感に感じ取り、実践する姿は、社会の中で生きる子どもという感覚を忘れさせなかった。身近に憧れの存在を見つけて保育士としての人生をスタートすることができたことを幸せに思った。

3. 園の目指す保育 「私たちは子どもと保護者の安心の場、安らぎの場、そしてよりどころとなって子どもたちを育みます」を保育理念とし、①命を大切にする子ども②友だちとかかわって遊ぶ子ども③自分で考え行動する子ども④豊かな感性をもった子ども⑤夢中になって遊ぶ子どもを望ましい子ども像としている。

(2) 保育士としての歩み

1. 保育士1年目 主任・嘱託保育士との複数担任で、1歳児17名を受けもった。初めての保育はまるで実習に来ているような感覚であった。生活の流れも子どもの名前も分からない中で、いつになったら慣れることができるのだろうと思う日が数日続いた。しかし、初めて入る環境だからこそ、初めて子どもを保育園に送り出す保護者と同じ気持ちで保育士の対応を見ることができると思い、自分の感覚を大切にしようと思いながら保育室に入っていた。その気持ちがあったからこそ、筆者が思い描いていた保育と実践されている保育との違いに気づき、子どもへの対応やそれぞれの保育士の保育観に違和感を覚える日があり、子どもにとって居心地のよい環境とは何かを考えた。また、時間差勤務をする中で担任がそろって話をするのが難しい日もあったが、初任者であっても一人の人として認め、保育士集団の中の一人として見て話し合いを進めてほしいという思いを常に持っていた。

2. 保育士2年目 3歳児2クラスの内1クラスを保育経験20年の保育士が担任し、もう一方、17名のクラスを筆者が担任した。初めての一人担任は、クラス運営の難しさを感じさせた。2歳児クラスから進級してくる子どもたちの不安同様、複数担任から一人担任になることは保護者にとっても不安を招くものであることを知った。保護者との関係で悩むことが増え、個人的な感情を整理しきれないとき、「親は自分の子どものことを1番に考える。自分の子どもがかわいいんよ。」と園長が言った。自分の子どもを1番に考える姿を肯定的に受けとめることで、親としての思いを理解していこうと努めた。いろいろなことはあっても、「親たちの声はとて大切に受けとめながらも、おもねることでは

なく『理解する』営みが双方にある関係」(⑩-49)を目指したいとの思いは持ち続けた。

経験が少ないために予期できないことの方が多すぎ、できなくて当たり前なのだから次に生かそうと思う一方で、自分を責めることが多くあり、保育は楽しいと思えることが少なかった。ベテラン保育士がもつ隣のクラスと自分のクラスを比べることも多かった。そんな中で、自分を励ましてくれたのは目指している保育を実践している人のいきいきとした姿であり、保育は蛇行するものでそこからおもしろさを見つけていけばいいと知ったからである。研修にも積極的に参加し、常に学び続けようとする人の輝きに出会った。

3. 保育士3年目 3歳児2クラスが1つにまとまり、退園や入園児を迎えての33名で4月がスタートした。嘱託保育士との担任が始まった。覚悟していたものの今まで受けもった子どもの倍の人数に大きな戸惑いがあり、4月は保育のことが頭から離れなかった。園の事情で、3歳児クラス後半に4歳児クラスを見据えての生活を送ることができず、新しい環境でいきなり大集団になった子どもたちはすぐに落ち着くわけがなかった。子どもたちは時に、保育園に行きたくないという言葉で環境への戸惑いを表した。33人、一人ひとりへの子どもの理解は時間をかけ、関わりを通して深めていけるものであるが、その時間を与えられてはいないかのような感覚があった。落ち着かない子どもたちを前にし、余裕がなくなると声を荒げている自分に未熟さを感じ、自己嫌悪に陥る日もあった。積み重ねないと見えてこないものがあるのに、すぐにでも結果になるものを求めている自分がいた。子どもが環境に慣れないことに戸惑う保護者の思いは、時に不満としてあらわれた。33人の子どもたちを見守る保護者に、子どもがだんだん

と環境に慣れていけばいい、そのための手立てをしていると伝えていく余裕も、一人ひとりの生活の様子を把握し伝達する余裕も、当時の筆者には十分なかった。集団生活を送る上で関わりのあり方を模索していく必要がある子どもへの理解、嘱託と正規という立場の異なる2人担任の連携の難しさ、年代や保育経験の違う保育士が共に保育を創造し目指したい保育を実践していくことの難しさを感じた。そして、園運営にかかわる仕事が一度に押し寄せ、疲れ果てていた。園が閉まるまで残って仕事をしても時間が足りず、何をを目指しているのか分からなかった。

クラスを任せられ、貴重な子ども時代に関わる保育士としての責任を感じ、仕事をこなさなければならないという思いに駆られていた。そのような切羽詰まった思いと、一人ひとりが気持ち良く過ごし保育士が33人の個性を受けとめることで子ども一人ひとりが仲間の個性を受け入れ、人とつながってほしいと思っていた。

3. 学ぶことは変わる

自分で自分をつくりかえていく存在である子どもたちの身体に自然と入りこんでいくような、興味・関心に沿った出会いは、学ぶおもしろさを感じさせてくれる。実践記録から保育の振り返りをし、「出会い」の意味を問い直していく。

(1) 子どもとの出会い

1. 一人ひとりの思いを大切に心に寄り添う

エピソード1：「先生のこと見ているよ」（1年目、9月）
新しい環境が苦手な女児 K。0歳で入園したときから関わりのある臨時保育士の T には心を開き、感情をよく出し、受けとめてほしい時は T のもとへ一番に向かっていた。もともと思いをぶつけてくるような子どもではなかったが、T は私とあまり関わろうとせず、ツンとした態度をとるようになった。母親は「家ではいつも、おおさせんせいすきーと言ってます」と話すが、K との信頼関係が築けていないと感じる。T に相談すると、T 自身も K を苦手と思う時があること、そして、K は私が A

と遊んでいる時にじっと見つめていることがあると知った。K とは対照的に、天真爛漫で、自分の感情をありのままに出すことができる女児 A。K は私と A の関係をどのように観ていたのか。A のように、関わりたいと思いつながりながらも、私には受けとめるだけのものがないと躊躇していたのか。K を気にかけていたようで、K の思いを理解しきれていなかった。K の思いを間接的に知り、笑顔で話をしてくれる給食の時間に関わりを多くもつことにした。それから K との関係が縮まってきたと感じることが増え、私の前でも感情を出して「がはは」と笑うようになった。「おおさせんせい」と声をかける K がいた。

子どもと共に生活すると、なにげない場面の中に様々な気持ちが混ざり合い時間が過ぎていると感じる。その一場面をどれだけ丁寧に観ようとするか、そこからどれだけのものが観えてくるかが保育の質を決める。職員間の話し合い、エピソード記録が大切と言われるのも、様々な角度から子どもの成長や思いをとらえ、理解し、関わっていくことが保育の質を高め、子どもにとって最善の利益を保障するからである。

筆者は、1年目から一人ひとりに「おはよう」の一言をかけることを大切にしてきた。保護者に必ず挨拶をするように、子ども一人ひとりに声をかける。それは、一人ひとりの存在を認めることであり、私の存在を認めてもらうことである。認めてもらえているという安心感がもてる大人との関係を基盤に、好奇心をもってまだ見ぬ世界に触れていこうとする意欲をもつことが、自分から環境に関わっていこうとする力になる。現在担任している子どもは、必ず「おはよう」を言いに来てくれるようになった。週初めの朝は、恥ずかしさと照れくささまで挨拶ができないことも多いが、後で必ず言いに来てくれる。人と人との関わりを丁寧に創りだしたいと思って、子どもと一日の始まりを迎えている。

このような気持ちはありながらも、反省すべき保育は多くある。

2. 自己を問う

エピソード2：冷静になって!! (2年目、3月)

背景 3月に入園してきた女児 H。様々な事情があり、集団生活の経験がなく、保護者と離れることへの不安が大きかった。3週間経っていても給食後にお迎えを頼んでいた。H は帰りたい気持ちが大きく、給食時間になると泣きだすという状況が続いていた。

エピソード 「食べたら迎えにくるよ」など、その時の H の気持ちをくんだ声かけをしていた。毎日のことで分かってはいたものの、園での生活に慣れてほしいという大人側の要求が強すぎ、泣くのをやめない H に対して、その日「泣くのをやめなさい」と声を荒げた。H は、チックのように目をしばたかせる。しまったと思っていた時、いつもやんちゃくする男児 Y が「先生。そんなに怒らんでもいいじゃん。優しくしてあげて」と一言。その日は、その他の子どもも H が泣くことをそこまで気にしていないようだった。Y の一言で、「そうだよ。まだ、慣れていないんだよね」と思い返すことができ、冷静になれなかった自分を反省。振り返ってみると、「そんなに怒らんでもいいじゃん」という言葉は、いつもはすぐにかつとなることが多い Y に私がよく言っている言葉だった。

エピソードに登場した Y の「怒らんでもいいじゃん」という言葉は、どのような経験を通して言えるようになった言葉かは分からない。しかし、振り返って考えた今、「心づかいが心づかいを生む」ことを実感したのである。

30対1という保育基準は満たしていても、一人ひとりの要求を受け入れていこうとすると、余裕を失う保育労働環境は多くある。そんな中で、一人の人として、子どもの意見を受けとめていくことがどれだけ自己を変えるきっかけになるか。常に私という人間を問われている。

子どもの言動にいらついてしまうとき、それは、子どもが分からなくなっている時である。余裕のない時間を経験した筆者は、常に自分の気持ちを自分自身で感じ、一呼吸おくことを大切に始めた。そうすることで、自分の感情だけで動こうとしているのか、そこに教育的配慮があって子どもと関わろうとしているのかなど、少し冷静な目で自分を見る時間をつくっている。また、教育的配慮だと思っても、「どうさせるか」という視点で子どもの行動を見てしまうと、

マイナス面ばかり見えてくるのに加え、保育士の思いばかりが強くなりすぎる。そして、そのような接し方では子どもの心に響かず、何がいけなかったのかを子ども自身が考える余裕をつくれぬ。保育士のひとりよがりですべて終わってしまうことも多い。

子どもの心に少しでも寄り添い、どうしてそこでその子どもがそうせざるをえなかったのかを、子どもの生育歴、家庭環境、経験してきたこと、性格、周りの子どもの様子、保育士の環境設定など子どもを取りまく状況を視野に入れ考えるように努めている。それは、「『どうさせるか』ではなく『どうみるか』」(16-208) という視点である。そうやって気持ちを寄り添わせていくと、子どもの言動を肯定はできなくとも、納得することはできるのである。自分が納得するためには、子どもの言動の裏にあるものを知ろうとする自分に変えていくしかない。子どもの発達過程を知ることしかり、子ども観を変えることしかり、学びを深めていくことである。

思いを巡らせながら子どもと話していると、最終的には子どもがきちんと答えを出し、気持ちを落ち着かせることができる。時間がかかる上、担任をしながら1対1の関わりをもつことが難しいこともある。しかし、それが子どもの発達を保障する保育であろう。

保育のプロであるということは、誰よりも子どもの側に立って、子どもの心もちに寄り添えることである。保育士の思いが大切に子どもに手渡され、その子どもたちが次世代を生きる子どもたちに手渡すことができるように、人との関わりを作りたい。そのために、子どもが自分で行動を振り返って考えることを保障できる大人でありたいと思う。

「叱るのではなく、気づかせてあげる」(10-30) 保育を心掛けてはいるものの、突然糸が切

れるように、自分ではどうしようもなくなる
ことが未だある。その時は、フリー保育士にヘル
プを出したり、後からでも同じ職場の保育士や
同期の保育士に話を聞いてもらったりする。職
員同士の信頼関係、仲間の大切さを感じる時で
ある。しんどいときにしんどいと言えること、
これも大切な力であり、筆者自身、それを受け
とめていくことができる一人でありたいと思う。

余裕がなくなる理由は、個人的なものばかり
ではない。広く見ていくと、法律・労働環境な
ど社会の仕組みが大きな原因となっていること
もある。個人の力だけで自分をダメだと思ふこ
とは間違っているとされた時、筆者は肩の荷
が軽くなった。視野を広げ、社会の仕組みを変
えていくことも、自分が一つの道を問い続けなが
ら歩いていこうとする時に大切なのだと感じる。

(2) 絵本との出会い

3年間で集めた絵本は170冊以上になる。絵本
を通して、子どもと子ども、子どもと私がつな
がりたいのである。そして、子どもにはよい作
品にたくさん出会ってほしいのである。

毎日、絵本を読む時間を年少・年中と2年続
けて作り担任したことで絵本が大好きな子ども
に育っていると感じる。いつも保育士が絵本を
読んでいる場所に椅子を持っていき、保育士を
まねて絵本を読む姿はほほえましくもある。

1. 心を通う経験が保育を楽しくする

エピソード3：子どもの日の習慣を知る。絵本『くわ
ずようぼう』（3年目、4月）

背景 こいのぼりだけで子どもの日に関する活動を終わら
せず、もっと豊かに活動を展開することで日本の習慣に
興味を持ち、楽しんでほしいという思いをもっていた。
そして、2月の節分会では4匹の鬼との戦いを終えたば
かりで、ネズミ婆さんや獅子などミステリアスなものに
強い興味を持っている子どもたちだったこともあり、絵
本『くわずようぼう』（男が嫁にした娘は鬼婆であるこ
とが分かり、男は2人で暮らすことをやめると言ったと
ころ、鬼婆は男を山へ連れて帰ろうとする。その道中、
男は鬼婆が菖蒲やヨモギが生えているところを通ろうと
しないことに気づき、隙を見て菖蒲の中に隠れ、難を逃

れた）を選んだ。

エピソード「こわい人がでてくる絵本だからね」とため
らいながら表紙を見せると、朝から落ち着かなかった子
どもたちがだんだんと絵本に意識を向けていき、話に入
りこむ。普段なら読み終えた後に、「おもしろかった」な
どの感想が次々出てくるにもかかわらず、この日は静ま
りかえり、誰も一言もしゃべらない。鬼婆にとても敏感
に反応したようだった。沈黙が続く中、ヨモギ・菖蒲・
こいのぼりなど子どもの日の話をする、「家にヨモギが
ないよ!!」と泣きだしそうな声の子ども。このままでは
鬼婆に連れて行かれる!!という不安でいっぱいになって
いるのだと気付いた。「よし、明日ヨモギを持って来るか
らみんなで見てみよう」と約束をする。(その日は、保育
士が鬼婆になり、絵本を通して鬼婆のイメージをしっか
りもった子どもたちと鳥鬼遊びをする)。

次の日、ヨモギを持って行き、子どもたちと匂ってみ
る。鼻がつまっているのに、絵本を見て自分でおいの
イメージをつくっている子どもも一緒になって「くさ〜
い」「いいにおい」と感想を言い合う。ヨモギは、おだん
ごに入れることもあると話をしたことで、泥だんごを作
る際、「ヨモギ団子を作ったよ」という子どももいた。

後日、菖蒲の花・よもぎ採しの散歩にも出かける。公
園につくと、ヨモギのような葉っぱを探し、「これー？」
と持ってくる子どもに対して、「匂ってみたら？よもぎの
においがする？」という会話を繰り返しながら、自然と
のかかわりを楽しんだ。

毎週絵本の貸し出しをし、自分で選んだ本を
借りて帰る。この実践以降、『くわずようぼう』
はいつも子どもの誰かが借りている。子ども
の興味に合った絵本を手渡すことができた時
の手応えと、どこからともなく湧いてくるこれ
からの保育への期待を保育士自身が感じた。子
どもと気持ちがつながっていることを実感した。

実体験を省くため、知識を詰め込むことだけ
に絵本を活用することはしたくない。雑草では
なく、それがよもぎだと知るなど、身近にある
ものに関心を向け、そこから想像を楽しみ、共
感しながら友だちと一緒に遊ぶ楽しさを知るこ
とができるように、子どもと楽しさを共有して
いけることが、絵本の魅力の一つであると思う。

2. 様々な人の思い・文化をつなぐ 筆
者はよく絵本原画展に足を運ぶ。そこでは、印
刷された絵本にはない、筆使いや色の混じりな
ど細かで繊細な部分を見ることができる。そし

て、原画の力強さを感じ、画家の思いを受け取ったような気持ちで帰る。また、直接作者から話を聞く機会も大切にしている。そのような経験を通して絵本に込められた意味を知ると、1冊の絵本がかけがえのないものに思える。

子どもにもかけがえのない一冊があつていい。大人になった時、ふとその絵本に出会って幼少期を思い返すと、優しい気持ちに包まれる。そのような幸せな時間を作っていくこともできるのではないだろうか。多くの表現にふれ、見て感じることで自分の身体に寄り添うような絵本は見つかる。作者の思いのこもった作品が大切な1冊になればと思う。様々な絵本と出会うことで、一人ひとりが持っている表現の幅の広さを知り、それが自分なりの表現を楽しんでいく時のエネルギーになればと思う。

クラスには、絵を描くことに抵抗を感じる子どもがいる。3歳児クラスでは、絵を描くことへの抵抗はなかったが、4歳児になって周りからの評価を気にするようになり、うまい・へたを判断基準にしてどうしても描けないようなのだ。描きたいイメージはあり、それを説明することはできてもパスを持つと描くことをためらう。しかし、10月の動物園への遠足を終えた後、黒い絵の具で輪郭を描き、コンテを使って色を塗りこすって仕上げるといふ、普段とは異なる絵の描き方をした時、その子どもの方から「はやくやりたい」という言葉を聞くことができた。描き終えた時のにこやかで満足そうな表情から、創りだす過程を楽しんだのだと感じた。経験画としていつもと同じように画用紙に絵を描こうかと悩んだが、表現することが楽しいと思える絵画活動はどちらかを考えて活動を決めてよかつたと思った。子どもにとって楽しめる活動を用意することの方が重要であると思うが、子どもの心の土壌を豊かに育てていく時、絵本

の可能性を考えるのである。

(3) 自然との出会い

1. 保育士の五感 吹き抜ける風や眩しいほどの光、どこからともなく香ってくる花のにおい。緑の少ない園だが、身近なものに季節を感じ、自然に目を向けるきっかけがある。そんな小さな刺激を敏感に感じ、想像をふくらませ、考えたことや不思議に感じたことを共有していく、ゆったりとした時間がもてればいいと思っている。周囲の様々な環境に好奇心や探究心をもって関わり、それらを生活に取り入れていこうとする力を養うための環境を用意していくには、保育士が五感を働かせ、注意を喚起することが必要である。それによって、初めて子どもの周りの環境が意味ある環境になるのである。秋田はそれを「注意の方略」(①-14)と言い、「メディア時代だからこそ、注意の方略による出会いとその出会いが、心の中に根付き表現として生まれるまでの過程をゆっくり保障する場づくり、それを支える保育者の柔らかな感性と物への専門的知識が求められているのではないでしょうか」(①-15)という。

エピソード4：尺八は何でできてるの？(3年目、4月)

今春から、外部講師によるけん玉教室が始まった。1回目のけん玉教室では、尺八で演奏される「もしかめ」に合わせて、けん玉の基本である屈伸運動をする。けん玉先生が尺八を片手に「これは何でできているか？」と質問をする。子どもたちはいきなりの質問に戸惑いながらも、様々な答えを言う。ヒントをもらい「竹」と答えるが自信はないように見える。今年になって笛の話は全くしていなかったで、子どもたちにとっては頭の片隅にもない質問だったように思う。

昨日の経験を今日につなげたいと思い、翌日、写真を見ながら笛の話をした。昨年、笛の皮むきを経験しているので、写真を見るとすぐに「たけのこ」と自信満々に答える。春の食材であることをふまえ、もう少しで土の中から出てくることを伝えた。すると「宇宙まで伸びていく」と言う子どもがいる。頭の中では、大きく育つというイメージがあることが分かる。そして、①絵本『ふしぎなたけのこ』を読み、子どもたちの想像を話で楽しんだ。その後、②わらべうた「たけのこいっぼんおくれ」で、共通のイメージをもって遊ぶこと、③実際に笛の皮

むきや大きさ比べ、皮の枚数を数えていく経験、④給食に汁が出た時「これ、筍よね?」と食材探しをしながら、食事を楽しむ、⑤筍を観ながら絵を描き、形をとらえて自由に表現する、⑥体操「たけのこ体操」を活動に取り入れ、筍をいろいろな角度から観て知ることができるようにした。

けん玉教室で「竹」と聞いてもポカーンとしている子どもの姿を見て、子どもが暮らしている環境を振り返った。私が育った自然豊かな環境とは異なる中で暮らしている子ども。しかし、保育者がどのように自然を保育の中に取り入れていくかで、自然への興味は引き出せると感じた。

筆者は、小さい頃から自然に親しみ、春になると祖父と一緒に春の山菜取りに出かけていた。夏には畑に野菜を取りに行き、秋には稲をはでにかけて干し、栗拾い・芋掘りをし、冬になると雪かきをしながらかまくらや雪だるまを作って遊んできた。夕暮れの空の何とも言えない美しさ、からすの鳴き声が響き渡る時の寂しさ、虫の音が教えてくれる秋の訪れなど、いつも自然が身近にあって時間や季節の移り変わりを教えてくれた。今思い返すと、とても幸せな経験ができた幼少時代である。自然との関わりを保障しにくい環境に身を置く今、子どもたちの感性をどのように育てていくかを考える。全身で自然を感じる経験がどれほど心地いいものであるか、時間を忘れて自然の中で遊ぶことがどれほど心に安らぎを与えてくれるか。そのような時間と経験を保育の中で、どこまで保障できるだろうか。保育園での経験がすべてではない。しかし、友だちと思いを共有することで生まれてくる感情の高鳴りを感じる子どもを豊かに育み、自然のすばらしさを感じることに繋がるのだと思うと、保育園での経験を豊かなものにしたと思う。

2. 子どもをつなぐ自然の力 3歳児クラスを受けもっていた5月。子どもたちと一緒に風車を作った。牛乳パックを細長く切って羽根にし、十字になるように貼り付けた。中央に

は綿棒をさし、先端には、小さなこいのぼりをつけた。持ち手となるストローにそれをつけることができあがる。遊ぶ方法は、風を探すこと、走って風を作りだすこと。作りたての風車を持って園庭に出ると、始めは走って回そうとする子どももいたが、「まわらんよ」と言って保育士の方に持ってくる子どもが多かった。しかし、時間が経つにつれ偶然にも風を受けて風車が回りだすと、子どもは保育士の傍から離れ風を追う。そして、風を探す子どもたちは、自然と友だちの風車に目を向け、いつの間にか風車がよく回っている子どものところに集まっていった。「こっちょー」と友だちを呼ぶ声も聞こえる。友だちにも同じ体験をしてほしいという思いが伝わってくる。

保育士があれこれ言わずとも、自然は、子どもをつなぐ。子どもの関心が小さな変化を探し、子どもは人と共感して遊ぶことを求める。自然がもたらすものの可能性を知った気がした。自然体験を保障するなかでも、様々な発見を友だちと共有し、不思議に思う心を探究心へと変えていけるように保育環境を考えていきたい。

(4) 過去との出会い

1. ヒロシマに生きる 広島には、いや、人類には忘れてはならない日がある。1945年8月6日午前8時15分。人間が作りだした一発の原子爆弾が、尊い命とこれから生まれてくる命の可能性を奪った。現在も続く原爆禍。一番大切なものに気づかされたのに、月日の流れは過去の過ちを薄れさせる。東日本大震災での人々の悲しみも薄れさせてはならないという気持ちに駆られる。

戦争を経験した人から直接話を聞く機会が年々減っている現在、惨事を経験したヒロシマの地に生きる子どもが、平和への思いを強くもてる種まきをし、過去を知ることと未来を創る

ことへの自覚を育む環境を作らねばならない。後世に語り継ぐ役目を担う権利の主体者である子どもが、二度と過ちを繰り返さないと力強く答えてくれるように。

もう二度と繰り返さないと誓った暑い夏の日が筆者にもある。保育園の頃、親と一緒に平和の日のリレーをし、小学校では、横断幕と千羽鶴を持って、炎天下、戦争反対を訴えて歩いた。その経験があって、戦争への恐怖心と嫌な感覚がある。子どもの一歩先を生きる私にも伝える義務がある。そのためには事実を知る必要がある。保育者の学びの質が問われる。

8月クラスだよりより：へいわってなんだろう？（3年目、8月）

子どもたちに原爆の事実を知らせる身近なもの「原爆ドーム」。その写真を見せると、「これ知ってる！」「お母さんとお父さんと見に行ったことあるよ」と教えてくれました。「爆弾が落ちる前は、きれいなものが飾れるところだった」と伝えた時、頭の中に描いていたイメージとの違いがあったのか、真剣な顔つきになりました。続けて、たった一つの爆弾で街が焼け、人が傷を負った事実を伝えました。

ばら組では、『へいわってどんなこと？』『ぼくがラーメンたべるとき』『あいうえおのき』などの絵本を読んでいます。絵本を通して、平和とは何かを子ども自身が考え、友だちと仲良く遊ぶこと、嫌なことは嫌といえること、相手の気持ちを受け入れることなど、自分たちにできることが平和な世界を築くために大切なことだと感じてほしいと思っています。

クラスだより発行後、『ヒロシマのピカ』『仲間さんのりんしゃ』『ちいちゃんのかげおくり』などの絵本も読んだ。子どもは、これらを「原爆の本」と言い、保育士に「読んで」と持ってこられることもあった。絵本の一場面を描かれた絵を観て「灯籠流し行ったよ」と、家庭での経験を教えてくれる子どももいた。しかし、そのような肯定的な姿ばかりではなく、ふざけて「爆弾落としてあげる」という子どももいた。他の子どもから「そんなこと言っちゃいけないよ」という声が出た。ふざけていたとしても言ってはいけない言葉があるということを話すと、ふ

ざけて言うことがなくなった。

毎年、平和の集会で観ていたビデオが苦手で、戦争は嫌いという感情だけですべてを知ろうとしなかった私は、まだまだ子どもに原爆の悲惨さを伝える力はない。知らない事実も多い。子どもと共に学びを深めたい。

2. 保護者と共に 保護者の中にもヒロシマで育った人が多くいる。今年度、主に年長児が取り組んだ千羽鶴は、保護者にも協力をしてもらった。年長児が平和公園に行く日までに千羽になるのかと不安に思った保護者がお迎えの時間に折ったり折り紙を持ち帰って折ったりして下さった。家庭で原爆の日について話す機会がなくとも、保護者が鶴を折る姿を見ると、平和を願っていると伝わる。子どもは、そのような一番身近な大人である保護者の姿を見て、また平和について考えるだろう。ヒロシマで育ち、そこで子どもを育てるとき、平和を願う大人の姿が重要な意味をもつ。過去を学ぶことと未来をつくることへの責任を感じる。

原爆の日だけが、平和への思いを強くするわけではない。日々の生活の中で、自分が大切にされているという気持ちも、自分は大切な人だと思える自己肯定感が根底にあって初めて平和な世界を望むようになる。一人ひとりの存在を保護者と共に大切に育みたい。

(5) 友だちとの出会い

1. 遊びこむ 同じ空間にいれば友だちになれるわけではない。他者がしたことを否定的に受けとめ、「やめて」を言うこともせず、「〇〇された」と逐一保育士に言いに来る子どもに、「〇〇されて、どう思ったの？」「なんでそんなことしたのかな？」「こうしてほしかったんじゃない？」「やめてって言ったらやめてくれたかもしれないね」など、他者の気持ちに寄り添える言葉を返し、自分の行為・感情を振り返り

ながら他者の気持ちを知ろうと思えるように関わりを持ち続けた。そして、「もう一回聞いてごらん」と、つながりを断ち切らないようにしてきた。そんな子どもたちは、少しずつ一緒に遊べる時間が長くなり、その中で思いが通じ合う経験を重ねて他者を受け入れ、一緒に過ごす時間を楽しみ始めた。遊びこめる環境の中で、人とのつながりを楽しんでほしい。

活動内容：砂場での山・川づくり（3年目、7月22日）

友だちと協力し、砂場での山や川作りが楽しめるように「使用する道具は一人スコップ一つ」と決めた。山を作った水を流すという楽しみな目標があり、気づけばみんな2・3人のグループになってアイデアを出し合いながら、互いに役割を分担して遊びを展開している。周りの様子を見て「負けていたられない！」と思った子どもたちは「もっと高くしよう」と声をかけあっている。子どもたちが山づくりに必死になっている中、保育士はせっせと川づくり。子どもたちの山が大きくなり、ある程度川が掘れたところで水を流し始めると、水の流れに沿って川の中を歩いたり、足をつけたりして水の気持ち良さを味わっている子ども、まだ山を大きくしたいと砂を積み上げていく子どもがいる。そんな中、保育士の川づくりを観て、自分でも作ろうとする子どもが現れる。戸外遊びでは、砂場で遊び続けることが少なく、友だちの遊びで気が散ってなかなか遊びこむことができない男児A。Aが掘り進める先に大きな穴を掘って待っていると、そこまで川を作ってきた。自分が作った川に水が勢いよく流れ込むと「うおー」と感激した様子。砂場での遊びの楽しさと同時に、やり遂げたという達成感を味わえたようだった。最後は、全員で山・川を壊して終了。その後、いつもより水をたっぷり含んでいる砂の感触が気持ち良くて、シャワーに行くまで触っていた。（日誌より抜粋）

遊びこむと、「またしたい」という次への期待と「次はこうする」という工夫が生まれる。遊びこめる環境でも言い合いは起きるが、それは創造するためである。遊びこんだものを、「すごいね」と言ってくれる友だちの存在がうれしくて、「一緒にやってみたい」「いいよ」で子ども同士の遊びが始まり、「次はこれをしてみよう」で遊びが深まる。思いの行き違いや重なりを感じながら、子どもは友だちと思える人を増やす。気持ちのふくらみを他者と共有し、作りあげる

過程を楽しむことで、人とのつながりが生まれる環境を用意していきたい。

遊びこめない環境では、戦いごっこなど攻撃的な姿が目立ち、破壊することを選択させる。気持ちを発散させながら、自分が打ちこみたいものに取り組めるように十分に用具を準備したり、やってみたいと思える遊びを用意していくことが求められる。

秋田は「遊びこむ」とは、「第一に『没入している』状態、集中している状態であり、第二にその子どもたちならではの発想によって遊びが展開継続している過程にある状態であり、第三に遊びの素材を使いこなし、わが物としていく状況」(①-24)と考えている。今回の実践は、秋田がいう「遊びこむ」状態には達していないと考える。子どもたちならではの発想によって遊びが展開継続するような「自由さ」を用意できなかった。ここを出発点として、秋田がいう「遊びこむ」を求め続けていく。

2. 子どもと子どもをつないで 4歳児での運動会は、友だちと協力して1つの物事を達成させる喜びを味わってほしいという願いのもと二人1組でスタートする運動遊びにした。それぞれの子どもの持ち味が生きるように、そして互いの持ち味が生かされるように、子どものペアを決めた。運動会までは、どのような遊びが子どもの興味を引きだし楽しんで遊べるか、挑戦しようとしていけるか、そして、保護者に子どもの成長を感じてもらえるかを考え、子どもの気持ちを励ましたり、認めたり、ふざける姿を叱ったりしながら、競技をつくった。その日々を終え、迎えた運動会本番でのRちゃんの姿が忘れられない。Rは自分勝手と思われる行動が目立ち、私を受けとめてという思いを常に持っているが、しっかり者である。Rのペアは、運動が苦手だけどがんばり屋のMちゃん。M

は、大縄くぐりやカラーボックス2段からのジャンプに、自分から一歩踏み出すことが苦手だった。他の運動遊びを探し、内容を変更するか迷ったが、Mは友だちと一緒になら一歩を踏み出すことができた。二人1組が意識できるまで、Rが先に大縄跳をくぐりゴールする姿があり、「Rちゃんのこと、頼りにしてるんだ。一緒に跳んであげて」とRを頼り、「ありがとね。Mも一緒にできてうれしそうだったよ」と声をかけてきた。本番では、何度か自分で挑戦しようとするMを待ち、Rはそっと左手を差し出した。Mはしっかりとその手を握り、カラーボックスからジャンプし、大縄をくぐってゴールまで帰った。Rが手を差し出した瞬間、Mはどれほどうれしかっただろう。引っ込み思案だった筆者は、Mの気持ちが手に取るように分かった。きっとあの手は、Rが本来持っている優しさの表れである。そのような一人ひとりの持ち味が生き、様々な人がいることを「おもしろいね」と感じながら日々を過ごしていきたい。

4. 今後の課題

保育所保育指針の第4章「保育の計画及び評価」保育の計画の中の(2)指導計画において、「イ 指導計画の展開(エ)保育士等は、子どもの実態や子どもを取り巻く状況の変化などに即して保育の過程を記録するとともに、これらを踏まえ、保育計画に基づく保育の内容の見直しを行い、改善を図ること」と明記されている。保育士は、記録を通して自らの保育と、子どもの育ちを振り返ることが求められている。

今回の広島文教教育学会での研究発表を通して、記録を通して振り返ることの重要性を再認識できた。まだまだ、自分のことに精一杯でみていないものがあり、今までの実践に疑問を持つ日が来るかもしれない。しかし、それすら

も、計画、実践、省察、評価、改善、計画を繰り返す行方からこそ明らかになる。加藤は「子どもと対話し、対話的に展開した実践を記録し、『マクロの視点』でふり振り返りながら明日の実践をデザインしていく」(④-148)ことが、日本の保育のスタンダードにならないかと考えている。それは、「現代社会を生きる子どもたちの中に『かけがえのない発達の物語』を創造する夢の営みであると同時に、子どものことを『喜びと希望を創りだす有能な学び手』(同項)としてとらえていくために私たち保育実践者に託された思いでもある。また、ローリス・マラグッチは「肝心なのは、相変わらず、子どもたちとともに歩む大人の『成熟』です。特に、教育の最高の目的は、子どものうちに自分の人生をよく形づくっていく能力を鍛えていくことでなければならない、ということ語らなくなった大人が問題なのです」(②-28)という。

学べば学ぶほど、「成熟」は常に今の状態よりも一歩先にあると感じるものかもしれない。そのような終わりのない「成熟」に向けて、常に自己を問い直し、新しい自分に出会うことで人間としての深みを増していける一人でありたい。そして、子どもと共によりよい社会を創造していこうとする大人が一人でも多くなるよう、保育現場から思いを発信していく一人でありたい。

おわりに

私立園で働くかどうか広島市に就職が決まっただけから悩んでいた。定期的に転勤がある公立園で、様々な保育士と出会い、保育を知ること自分の保育観を作りたいという思いと対照的に、理想としてあるものの中に身を置き、一本の筋を持った園で、自己を高めたいという思い。

大学卒業と就職が決まっていた春、東京にある保育園を7園見学する機会を得た。保育雑誌

でも目にしていたその園は、父親も保育に関われる行事を組んだり、子どもが口にする食事へのこだわりでおやつも手作りにこだわっていたりした。私立だからこそできることもあるのだろうが、自分たちで新しい価値を見つけ出すことへの尊敬と憧れを抱いた。また、大学時代からレジジョ・エミリアの幼児教育に関心をもっていた筆者は、レジジョ・エミリアの保育の理念を根底におき、保育を展開している園に魅力を感じた。そこには、筆者が感じる「気持ちのよい保育」があるような気がした。保育士として自分を高めていく時にふさわしい環境はどこだろうと考えていた。

今回、現在の保育情勢にもう一度目を向けてみると、公立園の存在意義を大きく感じた。公立園は地域の保育園のスタンダードである。そのレベルを高くすれば地域の保育水準は向上する。また、運営費の一般財源化や公務員総定数削減などの影響で保育士の非正規化が進む中で、正規保育士として働く意味を考えた。そして、政令指定都市で公立保育園が減っていないのは広島市のみという話も聞き、広島市の公立園で働く意義を感じた。保育という大きな枠の中でつながりを持っていれば、置かれた場所で花開くこともできると思った。

目指すことは、子どもの最善の利益の保障であり、子どもと保護者がよりよい関係を築き、よりよく生活を営んでいける支援である。保育園が子どもの発達保障の場であり生きる喜びを感じられるように、そして私たちの作りだすものが惨事を創りださないように、殻に閉じこもらず、様々な人の保育を観、実践して考え、自分に合った保育を見つけたい。社会で生きる子どもには、それぞれのユニークさを認め、互いに高めあい笑いあいながら生きる道を選択して

ほしい。そのために、子どもと共に歩みたいという思いを新たにしている。

謝辞：今回の執筆を通して、大学卒業後の3年間で学びの深まりを実感できた。勤務園の先生方・子ども・保護者の皆様との出会いに感謝の気持ちでいっぱいです。そして、本学の徳本達夫先生の励ましにより文教教育へ寄稿することができた。大学時代から、いつも支えて下さっていることに感謝しています。また、広島文教教育学会で実践研究発表の場を与えて下さったこと、この場をお借りして厚くお礼申し上げます。

引用・参考文献

- (1) 秋田喜代美、2009、保育の心もち、ひかりのくに
- (2) あまみきみこ作、上野紀子画、1982、ちいちゃんのかげおくり、あかね書房
- (3) 稲田和子再話、赤羽末吉画、1977、くわずにようほう、福音館書店
- (4) 加藤繁美、2009、対話と保育実践のフーガー時代と切りむすぶ保育観の探究、ひとなる書房
- (5) 加藤繁美、2010、子どもと歩けばおもしろい 対話と共感の幼児教育、ひとなる書房
- (6) 加用文男、1990、子ども心と秋の空—保育の中の遊び論一、ひとなる書房
- (7) 厚生労働省編、2008、保育所保育指針解説書、フレーベル館
- (8) 児玉辰春作、おほまこと画、1992、伸ちゃんのさんりんしゃ、童心社
- (9) 佐伯裕子、2006、親子再生—虐待を乗り越えるために—、小学館
- (10) 佐藤 暁、小西淳子、2013、こぼれ落ちる子をつくらない「聴く保育」、岩崎学術出版社
- (11) 佐藤 学監修、ワタリウム美術館編集、2011、驚くべき学びの世界 レジジョ・エミリアの幼児教育、ACCESS
- (12) 杉山 春、2004、ネグレクト 育児放棄—真奈ちゃんなぜ死んだのか—、小学館
- (13) 長谷川義史、2007、はくがラーメンたべるととき、教育画劇
- (14) 浜田桂子、2011、へいわってどんなこと？、童心社
- (15) 平松知子、2012、発達する保育園 子ども編 子どもが心のかつとうを超えるとき、ひとなる書房
- (16) 平松知子、2012、発達する保育園 大人編 大人だってわかってもらえて安心したい、ひとなる書房
- (17) 松野正子作、瀬川康男画、1966、ふしぎなたけのこ、福音館書店
- (18) 丸木 俊、1980、ひろしまのピカ、小峰書店
- (19) 吉田直美、1997、みんな大人にだまされた！—ガリバーと21人の子どもたち—、ひとなる書房
- (20) レオ・レオニ、谷川俊太郎訳、1975、あいうえおのき、好学社
- (21) レジジョ・チルドレン、2012、子どもたちの100の言葉 レジジョ・エミリアの幼児教育実践記録、日東書院
- (22) 大崎亜友美、2011、平成22年度広島文教女子大学人間科学部卒業論文 子ども感性を育む—子どもの権利条約の視点から—